
華と影

松井こまこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華と影

【Nコード】

N7277F

【作者名】

松井こまこ

【あらすじ】

「俺の妻になってください」彼女は答えた。「あたし、一組の成矢くんがすきな」少女の名前は綾小路華子。青年の名前は佐藤道影。十歳の社長令嬢。二十五歳のボディガード。二人の愛の逃避行は、周りを巻き込んで、やがては一つの喜劇を構築する。錯綜する恋心が生み出した、小さな恋の空騒ぎ。

01：誘拐

「苦しくない？　じゃ、痛い？」

彼はそう言うと、華子の猿轡さるぐしわを外し、手首を拘束していた縄を外した。

白い肌に赤い跡が刻まれていた。それを青年は悲しげに見つめる。

「ごめんね、華。ごめんね」

今にも涙をこぼしそうな青年に少女は言う。

「あたし、ぜったい嫌よ」

話は三日前にさかのぼる。

少女の名前は綾小路華子。あやのこうじはなこ青年の名前は佐藤道影。さとつみかげ

十歳の社長令嬢。二十五歳のボディーガード。

二人は出会い、そしてボディーガードは令嬢に恋をした。

運命の三日前。

彼はついにその想いを彼女に打ち明けた。

「俺の妻になってください」

彼女は答えた。

「あたし、一組の成也くんがすきな」

道影は思った。どんなに二人の想いが強かろうと身分が違う。華子の両親が許すはずがない。引き裂かれる愛。ならば――

二人は駆け落ちした。しかし未来の不安からか華子は躊躇した。

道影は華子のために彼女を拘束し、連れ去った。そして、現在に至る。

何処かの倉庫。暗い室内の中、積み上げられたダンボールに、華子は体を預けていた。拘束されていた縄を取り除かれても、事態はあまり変わらないみたい。目の前には、人語を理解しない一人の変態。頭が痛い。

「あのね、だからね、あたし、成矢くんがすきなのに！ 道影嫌なの！」

「照れなくても良いんだよ、華。あ、石田成矢の処理はまかせてね」「いやー！ なんで名前しってんのよ！ ……あのね、道影！」

華子はびしりと道影の額に指を突き立てた。変態にはちよつと強く言っただけの方が良いみたい。

「これってね、誘拐っていうんだよ。立派な犯罪なんだよ。こんなことしたら、お父様が道影に『刺客』おくっちゃうんだよ！」

「あはは。華ってば、可愛いなあ」

人語を理解していない。華子は絶望し、道影は笑ったが、このとき既に刺客は放たれていたのだ。

01：誘拐（後書き）

中一の男の子に「ロリコンってなあに？」と尋ねられました。

彼の純情さと無垢さに涙して、余分な知識を与えてはいけな
いと思
った私は即座に、

「ローリングコンプレックスのことだよ！」

と握りこぶしを作って言いました。今考えると、何のコンプレク
スだ、それ。回転か？回転するのか？

そんな私の初ラブコメです。生暖かい目で見守ってください。

02：説得

「おなかすいた」

「はい、子羊の香草焼きだよ。あと、こっち夏野菜のサラダ、ちょっとピリ辛だけど、華は大丈夫かなあ。でも辛いのがダメで、涙目の華も見てみたいな。あ、あとこっちは」

「なんでこんな物置みたいところで、そんなもの出てくるの?!」
薄暗い倉庫の中、華子の叫び声が響いた。

拝啓、お母様。

華子は誘拐されてしまいました。

事の起こりは三日前、淡いはずの告白から始まった。

『華、俺……華のことが好きなんだ!! だから……』

その人は、華子よりも大きな体をがたがた震わせて、言った。

『俺の妻になってください』

拝啓、お母様。

その人はあたしのボディガード。十五才年上の、綺麗な顔の男の人。けれどね、頭のほうは空っぽだったみたい。

「道影、分かってる?」

ダンボールにテーブルクロスを掛けて、簡易テーブルを作る道影を、華子は睨みつける。

「なあに、華」

道影は浮かれている。頬を赤く染めて、酷く幸せそうな笑みを華子に向けている。こんな幸せそうな顔されたら、少し言いづらい。

「あ……あのね、その……、まず、あたし、まだ小学生なの。結婚できないの」

「え？ どうして？」

「どうしてって……まだ十六才になっていないんだよ」

「え、十六歳にならないと結婚できないの？」

拝啓、お母様。

本当に空っぽでした。

「……あたし、好きな人がいるの。道影じゃないの」

「やだなあ、華、照れちゃって。それに、えっと、石田成矢だっけ？」

道影は、テーブルに料理を並べ、小さな蝋燭に火を灯し、銀のナイフとフォークを取り出す。そのナイフを眺めて、彼は笑った。

「大丈夫、ちゃんと始末してあげるから」

「道影！！」

「華……」

目の前にフォークが突き出された。その先に突き刺さった哀れな子羊。

「あーん、して」

「……」

どんなに睨みつけても、道影は笑みを絶やさない。むしろ少女の僅かな抵抗を心から楽しんでる。

華子はしぶしぶ口を開けた。

道影は上機嫌に彼女の口に、そのお手製の料理を。道影が肉の刺さったフォークを華子の口に入れようとしたとき、そのフォークが二人の前でガキンと折れた。

「なっ！！」

道影は少女を抱いて横に飛んだ。彼は、少女を守るように周囲を見回すと、その黒いスーツの内側に手を伸ばした。次に彼が手を引き出したとき、その手には黒光りする拳銃が握られていた。

道影は折れたフォークを眺めた。銃弾を食らったフォークの先は

捻り飛んでいた。

「こんなことが出来るなんて、まさか……！」

「ふふ、そのまさか、ですよ。道影さん」

倉庫の窓から入った月光が、一つの影を作った。

華子と道影は声の方へ振り向いた。

02：説得（後書き）

馬鹿は生温かい目で見守ってください

03：刺客（1）

コツと冷たい足音が、シンと静まり返った倉庫に響いた。

黒い人影が、足音とともに近づき、やがて月光に照らされた彼が姿を現した。

「お前は……」

「おひさしぶりです、道影さん」

そこに立っていたのは、黒いスーツをだらしなく着た金髪の青年だった。年の頃は、道影と同じか、もう少し若い。何故か左手に大きな薔薇の花束を持っていた。

彼を見て、道影がその口を開いた。

「翔矢……まさか」

「ええ、察しの通り。俺は綾小路本家が差し向けた刺客です」

翔也と呼ばれた青年は右手に握る拳銃を、道影に見せびらかすように見せた。かと思うと、彼はその銃を自分の胸の上で抱きしめて、顔を伏せた。その肩が小刻みに震える。

「え？」

やがて聞こえたのは嗚咽の声だった。何故泣き出すのか。わけも分からず、華子は目の前の青年を凝視してしまった。すると、翔矢は視線に気付いたのか、その顔を上げて、涙を拭いて言った。

「ああ、道影さん。愛する貴方をこの手で葬るなんて。天はどうして俺たちにこんなにも試練を与えるんだ!!」

「は？」

華子は、だらしなく口を開けた。目の前で、くねくねと腰を振り己の身の上を嘆く青年は、今、確かに今、『道影を愛している』と言いつつ放った。

「ええっと、翔矢……だっけ？」

華子は聞き間違いと自分に信じ込ませて、青年に聞いた。

「えっと、道影をすきなのか？」

「ええ、華子さま、あ、はじめまして。俺の名前は、石田翔矢とい
います。翔矢とお呼びください。ああ、そう、で、質問についてで
すが、違います、好きなのではなくて、俺は道影さんを『愛してい
る』んです。ああ、言っちゃった、恥ずかしい……。でも、道影さ
ん、愛してます。あ、これ道影さんに、です」

道影に薔薇の花束を差し出し、頬を染める翔矢の姿を見て、華子
は憐憫と侮蔑の入り混じった奇妙な顔で道影を見た。うん、でも、
愛にはいろいろな形があるってお母様もいつてた。認めてあげない
と。

「いや、いや、いや、華、違うよ、ただの後輩だから。ってか、い
らねえよ、ホモ、黙れ」

道影は長い両手と首を振って否定すると、翔也の差し出した薔薇
を叩き落とした。ばさりと花束が地面に落ち、それを翔也がしょぼ
んと見つめた。しかし、道影はそんな翔也に見向きもしなかった。
彼は華子に向き合って、握りこぶしを作って叫んでいた。

「あのね！俺が愛しているのは華一人ですから！華のためのフ
アーストキスもちゃんと取ってあるんだよ！」

「は？」

「え？」

華子と翔矢の声が、重なった。

床に叩きつけられた薔薇の花が少し乱れてもその美しさを誇って
いたが、誰もそれを見るものはいなかった。

03：刺客（1）（後書き）

ゲイは生暖かい目で見守ってください。

04：刺客（2）

叩きつけられた薔薇の花。それを前に、対峙するのは三人の男女だった。誘拐犯と攫われた令嬢と、彼女を助けに来たはずの刺客はどれもその役割を放棄していた。役割を放置した結果がこれだった。誘拐犯は握りこぶしを作って力説した。

「華のためにファーストキスもちゃんと取ってあるんだよ！」

彼は二十五歳。見目麗しいボーディーガード。ただし、頭の中は空っぽだった。

長い沈黙を破ったのは、翔也だった。

「えっと」

彼は口元を引きつらせて言った。

「あんなただれた女性関係を築きながら、ファーストキスまだとかありえな……へぐし！」

口封じはお早めに。道影は翔也を殴り飛ばした。そして倒れた翔也の頭を革靴で踏みつけたまま、華子の手を取って微笑んだ。

「俺の愛は真実です。大丈夫、式場で俺のファーストキスを捧げます。あ、もちろん華のもいただきます」

華子は地面に伏して痛みに耐えている翔也の姿を見下ろした。その顔はどこか嬉しそうだ。なんていうか、あたしの周りにはろくな大人がいない。

華子は道影の手を振りほどいて言った。

「だから、あたし、一組の成矢くんがすきなんだって。それに——あたしのファーストキスは六歳だよ」

途端に道影が固まった。

華子は固まった道影を見つめて、この駄目な大人は本当に自分の事が好きなのだと実感した。実感しても嬉しくなかった。

それから道影はたっぷり一分近く固まった状態でいた後（翔也の

頭は踏んだままだった）、螺子を巻かれた人形のように突然動き出し、ぐわしと華子の肩を掴んだ。

「何それ、華、誰？ 何処のどいつ？ 絞め殺してやる」

道影は、華子の肩をガクガクと揺さぶり、早口に少女を問いただす。

「刺し殺す、撃ち殺す、殴り殺す、とにかく殺す、華、ねえ、誰、誰なんだよ」

必死に華子に問い詰める道影だったが、華子は曖昧な笑みを浮かべるだけで、埒が明かない。

「華ってば——！！」

「あの、えっと、とりあえず、そろそろ俺仕事してもいいですか？」

道影が華子に掴みかかったとき解放された翔也。いつの間に蚊帳の外の彼は、自分の拳銃をにかけて二人の間に割って入ろうとしたのだが——

「翔矢」

「はい、なんですか？ 道影さん」

「今の俺を止めて、命があると思うなよ、いいか」

道影の目はすわっていた。

「刺し殺すぞ」

正直刺客どころじゃない。

04：刺客（2）（後書き）

『刺客』はここまで。

（補足）道影さんは大学時代荒れていたもので、爛れた女性関係を築いてましたが、本当にキスはしたことはありません。

05：義兄

「というわけで、僕は道影さん一筋なんです。もう電流が走りましたからね。運命感しました。デステイニーです。ああ、でも道影さんとならフェイトでもいいなっ」

勝手に悲恋でもしてろ。

きやつと顔を隠す乙女系男子略してオトメンを相手に、華子はため息をつきたくなったが相手は銃器を持っている。まして変な争いを引き起こして、オトメンとストーカー男の殺し合いなんて見たくない。

長々と聞かされた翔也の話は、道影の頭のとっぺんから足の先まで彼のチャームポイントのづらづらと述べるという拷問。まったりティータイムが汚された気分だ。そう今華子は、ティーカップを片手に二人の男の間に挟まれ、茶を飲んでいた。時々右側に座る道影から黒いオーラが出ていたが、華子はそれを無視して優雅にお茶を飲む。ファーストキスの相手なんて言うはずがない。華子は茶菓手に手を伸ばした。ちなみに、このお茶セットどこから持ってきたんだという華子の疑問は見事スルーされている。

そんな華子に意気揚々と語る翔也の顔は興奮で赤い。この人は本当に道影のことが好きなんだ。

「お嬢様、ご安心ください。道影さんは僕がこの手で始末します。痴情のもつれで死ぬだなんて、なんかドラマティックじゃないですか、ねえ、道影さん、ちゃんと後は追いますからね。あ、このケーキおいしいですね、さすが道影さん」

「勝手に死ぬ、勝手に食べるな」

幸せそうに茶菓子を頬張る翔矢の右手に道影はフォークを押し付けた。痛いってそれ、血でてるもん。笑顔の翔矢。一方、道影はひどく不機嫌だ。

「ところで、翔矢だっけ？」

「はい、そうです。今は綾小路家に雇われていて、道影さんは大学の先輩でした」

「道影……大学いつてたんだ」

あんなに頭の中からっぽなのに。

思わず華子はまじまじと道影を見てしまった。道影は華子の視線に気づくと、照れくさそうに笑った。いや、なぜ照れくさそうに笑う。

「俺、母親に勘当されて、家追い出されたんですよ。それでダンボールで暮らしてたところを、道影さんが拾ってくれたんです」

「かんどうつて家にかえってくるな！ お前とはもう家族じゃない！ ってやつだよ。お昼のドラマでやってた。……何したの？」

「えっと、チャネル争いで弟を半殺しにしたことだとで……。あれ？ 母親の恋人（男）取ったのが原因だっけ？ あれー？ まあ、俺は弟とも母親とも相性が悪くて、会うと喧嘩ばかり。ついに追い出されたんですよ」

「弟……」

華子は、じつと翔也の顔を見た。飛び込んできたときには気づかなかったが、こうして見ると翔也の顔は華子の良く知る人物に少し似ていた。

「……翔也の名前は、『石田』翔也だよ。まさか。でも……」

「ああ、弟はたしか華子さまと同学年ですよ。石田成矢」

「お義兄様！！」

思わず華子は翔也に抱きついた。二人の男は華子のいきなりの行動にぎよつと目を見張って叫んだ。

「は、華子さま！ 俺、子どもにも女にも興味ありません！」

「華！ こいつは歩くわいせつ物だから、触っちゃ駄目だって！」

男二人は慌てて翔也にしがみつく華子を引き離しそうとする。しかし、華子もただでは引き剥がされない。小さな子どもの体であるので、翔也も道影も下手に力をいれることが出来ない。

「大体、華子さま！ お義兄様って一体……！」

引き離そうとする翔也と引き離されまいとする華子。大人の二人の力に負けまいと半泣きになりながら、華子は叫んだ。

「協力して！ 成矢くんがだいすきなの！」

「?!」

途端に翔也の力がなくなり、華子は翔也の腕の中に飛び込むことになった。

「った……お、お義兄様？」

翔矢は華子を見ていた。まるでありえないものを見るかのように目を見開いて、その唇が僅かに震えて音を作った。

「華子さま、頭大丈夫ですか？」

男を好きな男に言われたくない言葉だった。

05：義兄（後書き）

次回成矢くん話へ

06：成矢（1）

「華子様、いいですか？ 成矢は羊の皮をかぶったエイリアンですよ」

「あたし、宇宙人がすきななの」
まるで出来の悪い生徒をしかりつける教師のように、翔也は目の前で正座する華子が言った。しかし、生徒は話を聞こうともしなかった。

「あたし、成矢くんがすき」

「あれのどこがすきなんですか。確かに見目はいいかもしれませんが、中身は屑ですよ」

正座する華子と、それを見下ろす翔也。そして仲間はずれの道影。第一回成矢くん検定が始まった。石田成矢の家族に認められたなら、成矢と近づく機会が増えるかもしれない。なんたって大絶賛（？）片思い中なのだ。味方は多いほうがいい。

華子は、頭の中で成矢の姿を思い浮かべた。

「成矢くんはね……」

そして華子は成矢について語りだした。

それは今から一年前、小学三年生の七月のことだった。

下校する生徒たちに紛れて、華子は空を見上げてため息をついた。突然の雨だった。朝の天気予報では確かに晴れると言っていたのに、空から落ちる雫は更に勢いを増そうとしている。無論、華子はお嬢様。迎えのものが来ているはずだが、それは校門の向こうの高級車の中で煙草を吹かす怠け者。ばれてないとも思っているのか、車内に染み込んだ臭いは使用人の怠惰を主張していた。道影なら嵐の中でも馳せ参じるだろうに、いつも華子の側にいた青年は今、華子の母親のお付でパリだ。

あのさぼり使用人め、お父様にいいつけてやる。

そう心の中で決心した華子だったが、今は目の前の問題だった。

雨に濡れるのは酷く億劫だ。しかし雨の勢いはさらに増すばかりで、いつこうに止む気配はない。職員室で傘を借りようか。そう思ったとき――

「はい」

一本の青い傘が差し出された。

目の前にいたのは、柔和な顔つきをした美少年。それが、石田成矢だった。

「貸してあげる」

「あ、あまずっぱーーーー！！！！ 何ですか、それ！ まさか、それが成矢との出会いとか？！ ありえない！！ それ絶対別人ですから！！」

「本物だったもん！ 何度も確認してたもん！ それに、それで好きになったんじゃないんだから！」

ほんのりと顔を赤くする華子を見て、翔也は口を閉じた。どうやら話は続くらしい。

「それで？ どうして好きになったんです？」

華子の隣に座る道影の機嫌が悪くなるのを感じながら、微笑みを浮かべた翔也は幼い子どもの恋物語を楽しむことにした。

06:成矢(1)(後書き)

ロリコンの出番が皆無

07：成矢（2）

小学校三年の七月。雨の降る昇降口で、華子をはじめて成矢に出会った。彼は傘を持たない華子に自分の傘を突き出して、微笑んでいた。

しかし――

「いない」

華子は即答した。

『貴女は施しを受けるような卑しい子ではありません。いつ何時も、貴女は誇りだけは忘れてはいけません』

母親の口癖だった。意味は良く分からなかったが、とりあえず、知らない人からものを貰うなと母親はよく言っていた。

だから、華子はその傘を受け取らなかった。母親の怒り狂う様子は目に見えていた。保身のために、少女はその傘を受け取らなかったのだ。けれど成矢はにこりと笑って、その傘を押し付けた。戸惑う華子を置き去りに、その少年は一人雨の中を走っていった。

華子は訳も分からず、少年の後姿を見送った。

「あー、それで好きになったんですか。なかなかありきたりですね……正直期待はずれです」

「違うもん」

華子は言った。

「怒ったの、すっごく怒ったの、あたし。だって成矢くんは私に『施し』をして『恩を売ろう』としたの。あたし、貰った傘を持って帰ったからお母様に怒られたんだから」

華子は思い出したように、顔をむつとさせた。

次の日、華子は青い傘を握り締めて、石田成矢のクラスを訪れていた。その少年が石田成矢だということはすぐに分かった。傘には

ネームプレートが付いていた。それを頼りに華子は石田成矢について友人に尋ねた。答えはすぐに返ってきた。むしろ、彼を知らない華子に周囲は目を見張った。

当時三組の成矢くんといえば、知らない女の子はいなかった。悪い意味で。

華子は友人の情報を頼りに三組を訪れると、三組の女の子に頼んで成矢を呼んだ。そして目の前に現れた成矢に青い傘を突きつけて顔を赤くして言った。

「施しはうけないわ!」

すると成矢はきょとんと不思議そうな顔をして言った。

「キミ、誰?」

その少年が成矢でなかったわけでも、成矢が実は双子や二重人格だったわけでもない。彼は間違いなく、昨日華子に傘を渡した少年であった。

華子は『施し』をされ母親に叱られた上に、問題の少年に無視に近い扱いを受けて、頭に血が上った。

「ふざけないでっ!」

そして少年に平手打ちした。

成矢は平手打ちされた頬を押さえ、しばらく呆然と華子を見ていた。突然の出来事に頭がついていってないようだった。その白い頬が、次第に赤へと変わっていく。それを眺めて、華子は少年に怒鳴りつけた。

「昨日は昨日で、傘おしつけて行くし、今日は今日でおぼえてないって……! 馬鹿にしないでっ!」

一息で言い切って、再び成矢を睨み付けようとしたとき――頬に衝撃があった。パンと乾いた音と共に、じわりとした痛みが右頬に広がった。

平手打ちされた。そう華子が気づいたとき、成矢は彼女が見惚れるほど美しい笑みを浮かべて、言った。

「僕の美しい顔に何するの」

07：成矢（2）（後書き）

ロリコンの出番はやはり皆無、ごめんよ、道影

08：成矢（3）

「僕の美しい顔に何するの」

そう言っただけで繰り出されたのは平手打ち。それも少年が少女に、だ。

話を聞いていた翔也は頭を抱えてうずくまった。

——わが弟ながら、頭のねじが吹っ飛んでる。

翔也は数年会っていない弟の姿を思い出し、次に現在の姿を想像してみた。鏡をうつとりと見つめるエイリアンの姿しか頭に浮かばなかった。昔からあの弟は翔也の理解を超えていた。三歳のときから、手鏡を手放そうとしなかった。五歳のときには、部屋一面を鏡で埋めた。自分以外に興味を示さない少年にとって、実の兄など通行人Aに過ぎなかった。あれはエイリアンだ。理解できない生き物だ。しかし現在翔也の前には、もっと理解できないものがいた。それは、そのエイリアンに恋した一人の少女。

綾小路華子。

雇い主の娘は、うつとりと目を潤ませて赤くなった頬に手を当てていた。どう見ても恋する乙女だ。翔也は信じられないものを見るように華子を見つめた。宇宙人に恋する異世界人に会った気分だった。

「えっと、その、話は以上ですか？」

少女の口から溢れ出すはずの甘い恋物語の終焉は、平手打ち。どこにそんな恋の始まりがあるだろうか。翔也は更なる話を期待して華子に尋ねた。しかし返答は――

「うん、そう」

話の終わりを意味していた。翔也は冷や汗を流した。

「えっと、あの……つまり華子さまはうちの馬鹿弟に平手打ちをされた……で？」

「で？　つて、なあに？」

華子は首をかしげた。

「いや、『なあに？』ではなくて、何かメモリーがあっただですよ。恋のメモリーが。こう、某小学生御用達少女マンガ雑誌にありきたりな展開が。命の恩人とか。はたまた一目ぼれとか。心温まるエピソードが……」

「うん、だから、あたし、成矢くんにぶたれたの」

不思議そうな顔をして、華子は翔也に笑いかけた。その笑顔には恋した少女だけが持つ甘いものがたつぷりと詰まっていた。甘すぎて、胸焼けを起こしそうなくらいだった。華子の恋する瞳は本物だった。

そして、それを見た翔也の顔がびしりと固まった。まさか。しかし、翔也は頭の中でその可能性を全力で打ち崩し、ぼろぼろの笑顔を浮かべて現実を否定しようとした。

「は、華子さま、いいですか？　あいつが華子さまに傘を貸したのだって、どうせ『雨に濡れる僕ってなんて美しい』とか考えて、いらない傘をドブに捨てるつもりで貸したんですよ。あいつにとって華子さまはドブですよ、ドブ。あいつに恋だなんて、ありえませんか。あいつだけはやめといたほうが……」

「あ、すごい。さすがはお義兄様。うん、成矢くんね、雨に濡れる自分にときめいたんだって。それでね、『キミみたいな一般人は僕にとってドブだから。ごみばこですらないから』って」

それを笑顔で話す華子の姿が恐ろしい。まるで恋人の睦言を語るように照れて顔を赤くする華子は翔也にとって未知の生物だった。

ああ、そうだ異世界人だった。

「は、華子さま、あなた……まさか」

「なあに？」

「あなたは……マ」

翔也が今まさに、彼にとって認めたくない真実を告げようとしたとき――

「華」

今まで沈黙を守り続けていた道影が、突然立ち上がった。

08：成矢（3）（後書き）

さあ、ロリコンの定番だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277f/>

華と影

2010年10月10日22時43分発行